ウラジオストクにて

情報文化学科　2 年　荒木彩夏

ロシアに留学するまで私は外国を訪れたことが 1 度もありませんでした。そんな私にとって外国は風景こそ何となく浮かぶものの、目に入る文字も耳に入る言葉も道行く人々も自分の知っているものと全く違うというのが全くイメージできませんでした。1 年生で初めてロシア語に触れて、そこからロシアにどんどん興味がわいていき、見渡す限りロシア語しかない世界やそこに住む人々の事が知りたくて留学を決意しました。

前半はウラジオストクでの生活に慣れていないせいか、時間が経つのがものすごく遅く感じました。後半に入るとあっという間に残り 1 か月、1 週間と過ぎていきました。

ウラジオストクは極東地域で最も大きな港町です。様々な建物が並び、たくさんの人や車が通りを行き来しています。特に車は渋滞が名物になるほどたくさん走っています。町の中心部には広場があり、定期市やイベントが開かれます。中心部は海にも近く、夏は多くの人が海沿いを歩いています。

交通手段は基本的にバスです。料金は一律 18 ルーブルと日本よりもかなり安いです。時刻表と言われるようなものはなく、バス停へ行ってお目当てのバスが来るのを待つという感じです。目的地や路線によって違いますが本数は多いので、運悪く逃したとしても数分で次のバスが来ます。行き帰りでバスの時間をいちいち確認しなくて済むので、かなり便利です。

＜勉強＞

授業は月曜から金曜まで、基本的に 1 日 3 限で 1 コマ 90 分の授業が行われます。授業は読み、書き、リスニング、会話表現だけでなく、音楽、美術、地理、歴史と様々な分野からロシアを学んでいきます。

音楽、美術、地理、歴史以外の授業はクラス分けテストの結果に基づいて 3 クラスに分かれ、同じくロシア語を勉強しているほかの国の人と一緒に授業を受けます。能力別で分けられているため、ついていけなくなるほど辛いということはなかったです。

時々、先生の都合で上のクラスの授業を合同で受けることがありましたが、同じところをやっているはずなのに自分が普段受けている授業よりはるかに難しくて驚きました。クラスによってかなり授業のスタイルが違うので、自分のペースで語学力を伸ばしていけるでしょう。

音楽や美術の授業では実際にロシアの民族楽器を使ったり、ロシアの歌をうたったり、ロシアの民族衣装の絵を描いたりと話を聞くばかりではなかったので、おもしろかったです。また、音楽の授業では学期末に授業で習った歌や曲をステージで発表しました。週 1 時間しかないのに曲数がやたら多くて大変だったけど、いい経験になりました。

地理、歴史もロシア語で授業を進めるため、難しい用語が沢山出てきてそれらを理解して覚えるのに苦労しました。特に地理は植物や動物から産業や気候と幅広い分野を勉強するので、それぞれの分野に関する用語を覚えるのが大変でした。

宿題は基本的にはどの教科も毎時間出してきます。問題を解くだけでなくテーマに沿った短い文章を書いてきて発表したり、時にはパワーポイントを使って発表したりする宿題もありました。

先生達は分からないところがあればちゃんと説明してくれるし、時々冗談を交えながら授業をしてくれるので楽しく勉強できました。ただ、分からない時はちゃんと「分からない。」と言わないと「分からないなら、遠慮せずに聞かないとだめだよ。」と注意されます。たとえ自分だけが分からなかったことだとしても、喜んで教えてくれるので分からないところはどんどん聞いた方がいいです。

授業の一環で博物館や水族館などを見学しに行ったこともありました。演奏会を見に行くことも多かったです。中には聞くのではなく自分たちも参加するものもあったのでおもしろかったです。

クラス分けされたクラスでは私達日本人以外の様々な国の学生たちと一緒に勉強します。ウラジオストクはアジアの地域が近いのでほとんどがアジア人学生です。私のクラスには中国、韓国、インドネシア、ベトナムの学生がいました。最初はぎこちなかったけれど、授業回数を重ねていくうちに仲良くなっていきました。授業の中で自分の国について話すことが結構多かったので、ロシア以外の国の事についても少し知ることができていい勉強になりました。帰国の日が近づいていくにつれて「もっとこのクラスで勉強したい。」という思いが強くなっていきました。クラスの人とは互いの帰国日を度々確認し合い、先生からは「戻ってこないの?」とよく聞かれ、「戻らない。」と答えると「このクラスがなくなるのは寂しい。」と悲しそうに言うので、そこまで言ってくれてうれしい半面、お別れし

たくない気持ちも強くて、だからこそあのクラスで勉強できてよかったです。

＜生活＞

学生寮は大学の敷地内にあります。寮と学校は繋がっていますが、普段よく使う教室からは遠かったので中を通って教室へ行くことは少なかったです。寮は 2 人部屋で日本人同士で 2 人ずつに分かれて生活していました。風呂・トイレは各部屋にあり、キッチンは共同でした。洗濯機は共用で有料なので洗濯は基本手洗いです。その代りなのかは分からないですが、係のおばさんが平日にゴミ捨てと部屋の掃除、週 1 回シーツとカバーを回収し、新しいのを置いておいてくれます。部屋ごとに置いてある家具の配置や種類が違うので、部屋によって雰囲気が違います。また暖房の効き、虫の出る頻度も部屋によって違います。どの部屋が当たるかは運次第です。

ロシアに来てまず初めに困ったのはお風呂です。ちょうどお湯が出ない時期に来たので、近くのスポーツセンターまで行ってシャワーを使わせてもらっていました。蛇口をひねってお湯が出た時はかなりテンションが上がりました。お湯が出ることのありがたさを実感しました(飲めませんが)。ところがお湯が出るようになってからも時々水しか出ないことがつうあったので、実のところお湯が出るようになってからのほうが大変だった気がします。ひどいときはお風呂の途中でお湯が出なくなることもあって、心臓止まりそうになりながら冷水のシャワーを浴びました。

食事は基本的に自炊になります。朝はパンなどで手軽に済ませて、昼は学校のすぐそばにある屋台で買って寮で食べて、夜は共同のキッチンで作っていました。たまに昼食を学校の食堂や近くのカフェでとることもありましたが、値段は圧倒的に屋台が安いので授業が終わるとほぼ毎日寄っていました。学校の近くにスーパーが 2 つあるので食材は大体そこで調達します。町の中心に行けば大きいスーパーもあるので休日はそこへ買いに行くことが多いです。意外と日本の商品が置いてあります(値段は高いですが)。だから、想像していたほど日本食が恋しくなるというのはなかったです。米も売っているし、そばやうどんなんかも置いてあります。しかし、そうは言っても手に入らないものもあるので、自分が使いたいものは

持って行ったほうがいいです。ただ個人的には、食材の調達よりも調達した後の方が大変だった気がします。共同キッチンにあるコンロは電気コンロなのですが、場所によって温まり方が違うので炒める時なんかはその調節が難しかったです。壊れているわけじゃなく、もともとそういう作りになっているのだそうで、慣れていくしかありませんでした。

ロシアに来たばかりの頃はスーパーで買い物するだけでもかなり緊張しました。事前研修で言われた通り本当に店員が無表情でレジを打っているので、頭の中では分かっていても「なんか悪いことしたかな。」と思ってしまいます。警官に話しかけられた時は本当に怖かったです。ただ、慣れてくれば無表情でもなんとも思わなくなってくるし、むしろそっちに慣れ過ぎて日本に戻ってきた時は、「日本の店員ってよくしゃべるな。」と感じるくらいでした。

店などで働いているロシア人はこんな感じですが、大学の先生や交流会で仲良くなったロシアの学生は全く違いました。みんなフレンドリーで冗談が大好きでよく笑います。道端ですれ違った人で「こんにちは。」と声をかけてくる人も中にはいます(大体が中国語でですが)。無表情だけれど決して感情がないわけじゃなく、出すときは惜しげもなく感情を出すという印象を受けました。そんなところがロシア人の魅力のように感じました。

ロシア人と接して意外に思ったことが、予想以上に英語が通じなかったことです。若い人なら多少は分かると聞いていたので、最悪の時はそれでなんとかなるかなと考えていましたが、なんとかなった場面はほとんどありませんでした。個人的には文法がメチャクチャでもいいから、自分の知っている単語をつなげて話すほうが相手も分かってくれることが多いし、かなり頭をフル回転させるので語学力向上の面で考えると英語に頼らないほうがいい気がします。

＜最後に＞

留学は私に様々な発見をもたらしてくれました。その発見は実際に現地を訪れて、そこで暮らす人々と接してみて、彼らと全く同じとまではいかなくてもその暮らしをしてみなければ分からないことです。「水道水は飲めない。」「お湯が出ない。」「店員が不愛想に見える。」「寒い。」などと知識として分かっていたとしても、それが生活にどう影響してくるかは実際に暮らしてみなければ分かりません。今、知識の例として挙げたものは悪い印象のものばかりですが、そんなところからも自分が今までどれだけ便利なものに囲まれて暮らしていたかが分かりますし、その暮らしが当たり前じゃないことに気付けたことは自分にとってものすごく大きな意味を持っています。留学前に先生から「不便を経験してください。」と言われましたが、その不便を経験したことで以前よりも多少の不便では動じなくなりました。日々の暮らしの中では不便をなるべく減らしていくことを考えがちですが、不便と上手く付き合っていくことも生き方としてありだと思えるようになりました。ウラジオストクでの経験は間違いなく今後の自分を支えるものとなるでしょう。